



園だより

3月号

新宿区立西戸山幼稚園 令和7年2月28日発行



みんなの幼稚園

園長 佐藤 淳穂

気温が緩んだ昨日のことです。飼育ケースで冬越しをしていたアゲハチョウ第1号が誕生しました。第一発見者のAさんが驚いて声を上げると、瞬く間に子どもたちが集まってきました。アゲハの羽は小さく縮れていて胴体の半分くらいしかありません。季節を待ちきれず、早めに出てきてしまったのかもしれない…と心配になりました。

「がんばーれ、がんばーれ」アゲハを囲んで子どもたちの大合唱が始まりました。そのうちに、アゲハからエネルギーを感じるようになりました。羽のしわが伸びてきているように見えます。「みどりののはっぱをつくらなきゃ」「今日が誕生日だからケーキをつくろう」



「お花をつくったら見てくれるんじゃないかな」…エールの大合唱の後には、それぞれが思い付く方法でアゲハに思いを寄せていました。

Bさんは白い花紙で作ったチョウを飼育ケースの前に置きました。Cさんはラップの芯で作った笛を演奏してあげていました。笛は、雛人形に魅せられて朝から作っていた「五人囃子の横笛」だそうです。「ひなまつり」や「ちょうちょ」の曲を口ずさんで聴かせていました。触角の付いたお面バンドをかぶって背中に羽を付けて自分がチョウになった子も現れました。

2時間くらいすると、アゲハチョウは閉じていた2枚の羽を左右にぐーんと広げました。「わー大きくなった」Aさんは友達を呼びに行きました。美しく立派な姿にみんなうっとり。言葉を失うとはこういうことだと思いました。さなぎの中に入っていた小さな体が数時間で空を飛べるまでに変化する過程は、神秘的としか言いようがありません。その直後にDさんが描いたアゲハチョウの羽には、鉛筆で細かい模様が表現されていました。Dさんはそのチョウを切り取ると「飼育ケースを作りたいんだけど、中が見えるようにしたい」と思案していました。透明のセロハンをうまく使って、中が見えるケースが出来上がりました。チョウがその中に入ると、本物のアゲハとDさんのチョウの飼育ケースが二つ並びました。友達がそばに来て「Dさんすごい」「いったい何歳なの？ぼくは5歳だけできないよ」と絶賛していました。

「心が動いて、何かを思いつく」これが遊びの始まりです。一日の中でそれは何回も繰り返され、小さいけれど大事な出来事が重ねられる暮らしがここにあります。そして今、年長組になった子どもたちは、協同での活動に醍醐味を感じるまでに成長しました。まもなくすみれ組は修了式を迎えます。子どもたちが西戸山幼稚園で出会った仲間とどنگりと柿とブドウと虫と鳥と…共に過ごしてきた奇跡の時間を振り返りながら、幸せに浸りたいと思います。